



令和6年度 加古川市青少年海外派遣 報告書



公益財団法人 加古川市国際交流協会
Kakogawa International Association



公益財団法人 加古川市国際交流協会
〒675-0065 兵庫県加古川市加古川町篠原町21-8
TEL:079-425-1166
FAX:079-425-0200

目次

加古川市の姉妹都市 01

中学生海外派遣

中学生海外派遣 研修概要 02

派遣研修10日間の記録 04

団員レポート 06

青年海外派遣

青年海外派遣 研修概要 28

派遣研修11日間の記録 30

団員レポート 32



加古川市の姉妹都市

ニュージーランド・オークランド市

オークランド市は北島の北部に位置し、ニュージーランド最大の都市です。民族構成はマオリ族を始め多岐にわたり、多様性に富んだ文化が育まれています。マタカウ湾とワイタケレ湾の間に位置するオークランド市では、点在する島々、海岸、森林保護地などの自然が豊かに息づいており、誰もが気軽にレジャーを楽しむことのできる環境が整っています。

加古川市は、1992年にワイタケレ市と姉妹都市提携しました。その後、ワイタケレ市は2010年にオークランド市をはじめとする周辺の市町と合併し、現在のオークランド市となりました。これにより、加古川市とワイタケレ市の姉妹都市交流は、オークランド市との交流に引き継がれることとなりました。



加古川市が寄贈した平和の鐘



ブラジル・マリンガ市

マリンガ市は、ブラジル連邦共和国南部のパラナ州に属し、精密な都市計画に基づいて建設された新興都市です。原生林をそのまま残した自然公園（インガ公園）を街の中心に配し、縦横に走る道路には、すべて街路樹が植えられ、街全体が緑にあふれています。日系人が多いことでも知られ、政治、経済、文化等のあらゆる分野で日系人が活躍しています。

加古川市とマリンガ市は、1973年に姉妹都市提携を締結しました。市内には、加古川市との姉妹都市交流を記念して「加古川大通り」や日本庭園がつくられ、青年の相互派遣を始めとする各種団体の訪問など、親密な交流が行われています。



1973年の姉妹都市提携調印



青年海外派遣

次代を担う若者を姉妹都市「ブラジル・マリンガ市」に派遣し、現地での交流を通じて外国人への理解を深めて国際的視野を持ち、国際協力、国際親善に貢献できる人を育成することを目的とした、第30回加古川市青年海外派遣事業を実施しました。

研修概要（事前研修～派遣研修～報告会）

（1）派遣生

8名

高橋 永遠、徳田 陽華、富田 桜子、長野 心美、原 晴太、松井 小春、松尾 裕輔、吉元 流人

（2）団長、引率

中田 直文（副市長）、坂本 千穂

（3）事前研修

8名の派遣生は、訪問先の文化や歴史、習慣などを学ぶことで、日本と違うところを発見して、相手を理解し、認めることの大切さを学びました。また、南米を中心に多くの移住者を送り出した、神戸市立海外移住と文化の交流センターを訪れ、過去から現在へとつながる海外移住の歴史と意義を学びました。そして、帰国後に自分自身ができる国際貢献は何かということを考える機会も持ちました。

6月23日	オリエンテーション、先輩の体験談
7月7日	ポルトガル語研修、訪問地研究発表
7月28日	海外移住と文化の交流センター見学、自己研修テーマ発表

（4）結団式

8月3日に青年海外派遣と中学生海外派遣の合同で開催。市長や市議会議長から激励の言葉をいただき、派遣生代表が意気込みを力強く宣誓しました。

国際ソブチミスト加古川から現地で使用する記念品をいただき、加古川ライオンズクラブからマリンガ市に寄贈する日本語学習図書を預かりました。

（5）派遣研修

月 日	場 所	内 容
8月7日	加古川～関西国際空港	
8月8日	ドバイ～サンパウロ～マリンガ	
8月9日	マリンガ	サンフランシスコ・ザビエル学校訪問、市長表敬訪問、高齢者福祉施設和順会視察、マリンガ市功労市民賞受賞式典、記念夕食会
8月10日	マリンガ	加古川マリンガ外国語センター、加古川マリンガ外国語センター改修工事落成式、NipoBrazileiro日本文化祭
8月11日	マリンガ	ホームステイプログラム、お別れ夕食会
8月12日	マリンガ イグアス	イグアスの滝（ブラジル側）見学
8月13日	イグアス リオデジャネイロ	イタイプ発電所見学、バードパーク見学
8月14日	リオデジャネイロ	コルコバードの丘、砂糖パンの丘等見学
8月15日	リオデジャネイロ ドバイ	
8月16日	ドバイ	ジュメイラモスク、ブルジュ・ハリファ等見学
8月17日	ドバイ～関西国際空港 ～加古川	

（6）事後研修

9月7日に開催。現地での経験を今後どのように活かせるかなど意見交換し、自分自身ができる身近な国際協力や国際親善を考える機会も持ちました。

また、報告会の発表内容をグループ別に検討し、以後、自主的に集まり報告会の発表準備をしました。

（7）報告会

11月17日に青年海外派遣と中学生海外派遣の合同で開催。それぞれのグループ別に発表し、発表後、中学生と青年、国際交流協会役員で座談会を行い、海外派遣で感じたこと、経験を通じて自分ができる活躍の場などについて意見交換をしました。

派遣研修 11 日間の記録

マリンガ市役所表敬訪問



学校訪問



NipoBrasileiro
日伯フェスティバル



ホストファミリーとのお別れ



マリンガから
イグアスへ



マリンガ大聖堂



イグアスの滝
(ブラジル側)



コルコバードの丘



ブラジルの日常

高橋 永遠

加古川市の青年海外派遣が僕にとって初めての海外渡航でした。初めての国ブラジルでの生活を体験して感じた、ブラジル人の生活とブラジルの言語であるポルトガル語の2つに焦点を置いて報告します。

まず、1つ目はブラジル人の生活についてです。僕のホストファミリーは日本にルーツを持つ日系人で、日本と先祖をとっても大切にしている家庭でした。初めて家に行ったとき、まず最初に先祖の仏壇に手を合わせてから上がらせてもらいました。

また、僕が何時までに集合しないといけないと言ったとき、ホストマザーが「ブラジル人は集合時間に遅れる人



ホストファミリー

が多い。」とか、「もっと遅い時間でいいのになあ。」と言っていて、日本と違い時間に寛容であると思いました。そして、夜はマリンガのホストファミリーやその友だちと遅くまでダンスをしました。とても楽しくて、ずっと続いてほしいと思いました。

ホストファミリーは、友だちや知り合いに会った時に、ハグして「ちゅ」と口で言っただけでいいと思っていました。日本では、ボディタッチがあっても握手ぐらいですが、初めて会う人とてもハグをすることに驚きました。

また、ホストブラザーが大学の医学部の研修医のようで、僕が将来、看護師を目指していることを伝えると、大学の中にある病院を見学させてくれました。ブラジルでは大人も子供も診療費用が無料と教えてもらい、医療でも日本とブラジルでこんなにも違いがあるのだなと思いました。

2つ目は、ブラジルの言語であるポルトガル語についてです。マリンガの人は、会う人会う人誰もが本当に優しくフレンドリーで、僕は心からブラジルにもう一度行きたいと思っています。ですから、コミュニケーションの大切なツールであるポルトガル語に興味が湧きました。

ホストファミリーやホストファミリーの知り合いの人が、ブラジルの言語であるポルトガル語を教えてくださいました。例えば、自動車は「カーブ」というように英語に似ているものもある



学校訪問

ば、聞いたことがないようなもの、日本語にどこか似ているものもありました。

ホストファミリーと車で移動をしているとき、ホストファミリーの友人は日本語を話すことはできなかったけれどスペイン語を勉強していて、僕も高校でスペイン語を少し勉強していたので、スペイン語、英語、ポルトガル語、そして日本語が飛び交うような機会がありました。このとき、言語が話せなくてもダンスや、ジェスチャーなどで仲良くなったり、相手が何を考えているのか理解し合えることを感じました。相手が話することができる言語を少し理解するだけで、もっと仲良くなったり、話したいことがすぐに伝わったりと、相手との距離感がぐっと近くなった感じがしました。この経験のおかげでもっと言語を学習したいと思いました。そしてもう一度ブラジルに行く時には、少しでもポルトガル語で話せたいと思います。

僕はこの青年海外派遣の経験を活かして、

これからの生活の中で外国人が日本に来て困っていたら、自分から話しかけたいと思います。僕の将来の夢は看護師になることなので、ブラジルの医療現場を見た経験を活かし、日本に住む外国人の患者さんや、これから増えるであろう医療職の仲間たちとの橋渡しや話し相手になろうと思いました。そして、僕自身もブラジルのホストファミリーにしてもらったように、ブラジルからの派遣生にたくさんの思い出を作ってあげたいと思います。18歳でブラジルに行き、とても貴重な良い経験ができて本当に良かったです。本当にこの経験を忘れることはないです。



たくさんの宝物に 出会った11日間

徳田 陽華

ブラジル・マリンガへの派遣当日の朝は、初めての南米、1日を超えるフライト時間、慣れない食事、初めてのホームステイなど、不安な気持ちしかありませんでした。しかし、今回の派遣事業を通して得た経験や人との出会いは私の考え方を大きく変えるものであり、日本に帰ってきたときには、心からもう一度ブラジルに帰りたいという気持ちになりました。

まず、私がブラジルで感動したのは「人の温かみ」です。マリンガ到着後、初のプログラムは「サンフランシスコ・ザビエル学校訪問」でした。学校の門を潜り抜けたときから溢れ返るほどの歓声を受け、今まで経験したことのない歓迎に衝撃を受けました。各教室に入り、子供たちと触れ合う中でも、日本語で挨拶をしてくれたり、日本の風



ホストファミリー

景画を描いて渡してくれたり、終始日本を感じるようなおもてなしを受けました。日本から離れ、文化も生活模式も全く異なるブラジルに不安を抱いていた私にとってこのおもてなしは、かつてないほど温かく感じました。校長先生からのお話で、この学校では日本語を生徒に教えており、日本に関心を持つとともに、感謝の心を学ぶためにも日本語を勉強していると伺いました。このお話を聞いて、日本の反対側でこれほどにも日本に興味を持ち、日本から来た私たちを盛大に歓迎して下さる方々に感謝の気持ちでいっぱいになるとともに、自分が事前研修などで学んできたことがいかに準備不足であるかを感じ、もう少し、ブラジルのことを調べておけばよかったなと少し後悔しました。このように感じるほど、現地の方々とは私たちとの交流を楽しみにして下さっており、改めてブラジル人の温かみを感じました。

次に、ブラジル滞在中で印象に残っていることは、言葉の壁は超えられるということです。私は日系人のホストファミリーの家に滞在していましたが、日本語と英語を話す家庭であり、お母さんやお姉さんとは日本語で、お兄さんとは英語で話していました。ブラジルの言語教育では、ポルトガルやスペイン語を学ぶ人が多く、私のホストファミリーのようにそれ以外の言語を話す人も増えてきているといえます。



ザビエル学校 お手紙

ただ、第一言語はポルトガル語のため、空港以外では、街中で英語が通じることがほとんどありませんでした。今まで、言語が通じる国でしか生活をしたことがなかったもので、街中で話しかけられても笑顔でいることしかできないことには無力感を感じました。しかし、それ以上に言葉の壁を超える深い交流ができた思い出がたくさんあります。例えば、ホストファミリーの家に滞在しているときに、頻りに甥っ子家族が遊びに来てくれましたが、3歳の子供たちはポルトガル語しか話せないため、初めは緊張してしまっただけで向き合ってくれませんでした。しかし、ジェスチャーゲームやトランプなどの言葉を必要としない遊びを通して、言葉のコミュニケーションをとることができなくても、仲良くなれることを実感しました。言葉の壁は簡単に超えられるということはこの派遣の中で大きな発見でした。

最後に、今回のブラジル派遣を通して、ブラジルで出会った人は私たちが外国人としてではなく、本当の家族のように迎えてくださったことがとても印象に残りました。一方で日本では外国人に対して体格や容姿の差、また様々な情報による偏見や抵抗を持っている人がいるため、私はこのような考え方を少しでも減らす活動をしていきたいと考えています。まずは、大学の国際交流スペースでブラジル研修での経験を学生の前で発表し、異国の地で優しさに出会った思い出などを伝えるとともに少しでも誤った偏見や知識を持つ人を異文化に対して温かい気持ちで迎え入れてくれるような人に変えていきたいです。



ブラジルでの 心温まる交流

富田 桜子

ブラジルでは、日本では味わえない熱量の歓迎を数多く受けました。その中でも印象に残ったことはホストファミリーに20歳の誕生日を盛大にお祝いしてもらったことです。ホストブラザーのルイスからは、ホームステイ最終日にホームパーティーをすることを聞いていました。しかし、自分の誕生日をホストファミリーに直接伝えていなかったのと、誕生日がその2日後であったことから、お祝いをされるとは思っていませんでした。そのため、ホストマザーがケーキを出してくれ、みんなが誕生日の歌を歌い始めた時はすごく驚きました。ケーキの上の1本の大きなろうそくが目の前で持ち花

火のように弾けながら、たくさんお祝いの拍手を聞いた時は、胸がいっぱいになり、ありがとうと何回も言いました。またブラジルではケーキを切り分けるのは誕生日の人で、最初の切れはその場に居る人の中で一番好きな人にあげるという風習があります。日本でそのような経験がなかったため、誰に渡すかはかなり迷いましたが、ホストシスターのアンナに渡しました。アンナは自分が渡されるとは思っていなかったみたいで、とても嬉しそうにしていました。「最初のケーキを渡されたのは初めてだったから本当に嬉しかった。ありがとう」と何度も言われ、渡してよかったと心から思いました。

他にも熱烈な歓迎をたくさん受ける中で、共通して感じたことがあります。それは心から歓迎していることがまっすぐに伝わり、ポジティブなエネルギーをたくさんもらえることです。どうしてこれだけの歓迎ができるのだろうと最初は不思議に思っていました。しかし、ブラジルの人たちが交流する中で、自分よりもエネルギーにあふれ、人生を楽しんでいると感じる人にたくさん出会い、このように情熱をもって日々を生きているのが歓迎にも表れているのだと感じました。来年にはホストブラザーのビクターが加古川に来たいと言っていたので、自分にできる精一杯の歓迎でお返ししたいと思います。私はホストファミリーとたくさん話をしたのですが、その中でたくさんの



ホストシスターと



ホストファミリーに見守られケーキカット

共通点を見つけました。ホストファミリーに初めて会い、家へ向かう車の中で英語が話せるルイスにポルトガル語に翻訳してもらいながら、お互いに質問をたくさんしました。会話を通して、自分が大学で学んでいる学問をホストマザーのシルヴァーナさんが職業にしていること、ルイスは勉強の合間にピアノを気分転換に弾くことが好きなこと、アンナが全巻そろえている小説を自分も全部読んでいたことなどを知りました。車内のたった10分の会話でしたが、自分が今までしていた好きなことがこんなところで繋がるとは思ってもいなかったのでもっと驚きました。普段から様々なことに取り組んでいると、話す内容が深く、充実したものになると感じたので、ブラジルの人のようにエネルギーを持ってたくさんの方に挑戦しようと思いました。

また、日本語学校の生徒たちとも交流をしたのですが、初対面にも関わらず親友のように接してくれました。ブラジルの人の

陽気さを肌で感じて、自分もこのくらい海外の人に心を開いて接したいと強く思いました。

今後は、ブラジルでの貴重な体験を周囲の人に伝えていくとともに、受けた恩を返していきたいと考えています。具体的には在住外国人に日本語を教える日本語ボランティアを積極的にを行い、ブラジルから来る派遣団の人たちの歓迎をしたいと考えています。そしてその時は自分がしてもらったように、人にパワーをもらえるようなコミュニケーションをとりたいと思います。



異文化交流が 教えてくれたこと

長野 心美

私は、ブラジルのマリンガ市で日系人の家庭にホームステイをし、外国なのに日本で交流する経験をしました。また、昨年度はニュージーランドのオークランド市でホームステイをし、英語を使って交流しました。これらの経験を通じて、私が感じたことを報告します。

◆ブラジルとニュージーランド

両国の海外派遣の経験から相違点・共通点を学びました。

① 両国の相違点

・ホームステイ

ホームステイ先へ帰ると、ニュージーランドでは「自分の良いタイミング



ホストファミリーと

でリビングへ来たなら良いよ」と提案され、ブラジルでは「すぐにリビングへおいでよ」と提案されました。

このことから、両国では相手への尊重や関わり方が異なり、ニュージーランドは個人それぞれのスペースや時間を大切にすること、逆にブラジルでは個人よりも皆でスペースや時間になるべく多く共有することを大切にしていると感じました。

・学校訪問時の歓迎

ニュージーランドの学校では、ニュージーランドの文化（マオリの伝統的な踊りのハカ）を披露することで、自国の誇りをもって歓迎してくれました。一方、ブラジルでは、日本の文化（日本の国旗を掲げ「ふるさと」の歌を合唱）を披露することで、日本への尊重をもって歓迎してくれました。

② 両国の共通点

長く複雑な歴史を経て、先住民や移民など多種多様な人種の人々が、お互いの文化を尊重し、共存してきた結果、多文化共生という考え方は、意識されることなく当たり前のものとなっているのではないかと感じました。

◆ブラジルらしさ

ホストマザーが外出先で若い女の子と親しげに話していたので、まさきりホストシスターの友人だと思っていたら、実はホストマザー自身の友人でした。年齢や性別にとられないフレンドリーな性格から日本とは違うブラジルら



インガ公園

しさを感じました。

◆ブラジルと日本の関係

今回のブラジル派遣のホストファミリーは、日系のファミリーでホストファザーはお寺のご住職でした。ホストファミリーは、遠い異国のブラジルで、日本人の心やルーツを信仰で支える大切な役割を担っていると感じました。また、他の日系人同士も繋がりが強く、日本文化祭や日本語学校の運営にも積極的に協力する姿に感動しました。ホストファミリーや日系人の方々から日本文化を大切にしながら現地の文化となじみ、共存してきたように、わたしも日本で日本人と外国人の方の架け橋になりたいと思います。

◆加古川市民として

マリンガでは、「マリンガ楽しんで？」とよく聞かれ「とても楽しい！」と答えると、ほとんどが「マリンガ楽しいよね！」と共感してくれました。この反応からマリンガ市に自信と誇りを持っていることが伝わってきました。また、私のことを「日本人」ではなく「加古川から来てくれた人」とし

てやりとりしてくれました。マリンガ市での経験は、私が「加古川市民」である自覚と誇りを育てる良い機会となりました。

◆私がこれからできる国際交流

言葉だけでなく、文化や価値観の違いを理解し、尊重することの重要性を学びました。これからも、英語や他の言語を学びながら異文化に対する理解を深め、国際社会でのコミュニケーション力を高めていきたいと思っています。

私は海外派遣で、言葉の通じない場所や異文化の中での生活がどれだけ大変か実感しました。そのため、今は日本に住んでいる外国人の方の気持ちに共感し、ストレスなく暮らせるように支えたいという思いが強くなっています。

これからの国際交流で重要なことは地域貢献だと考えます。今後は、加古川市で日本語ボランティアとして活動し、将来的に日本語教師となって、外国人の方が日本語を学ぶサポートや異文化交流を支援することで、日本や加古川市の国際交流に貢献していきたいです。



人生の岐路

原 脩太

僕はこれまでの人生に満足していました。しかしこの青年海外派遣を経験し、その考えが変わりました。

僕は青年海外派遣を経て感じたことがたくさんあります。まず、マリンガ市の方々の僕たちへの愛情です。それは今までの自分では想像できないものでした。例えばマリンガ市の学校に訪問した時に、生徒や教師など全員が大歓声で迎えてくれました。そして全員で日本の曲「ふるさと」を3番まで歌って大歓迎してくれました。僕は海外という慣れない場所に行き、とても不安を感じていましたが、それを見て自然と笑顔になりました。もし、ブラジルの方が日本に来ると言われたら、簡



ホストファミリー

単な挨拶の仕方などは把握しておくと思いますが、ブラジルの歌を歌ってあげようなど今までの僕は思わなかったです。ましてや今回、自分たちは受け入れてもらう立場であるにもかかわらず、ブラジルの皆さんのような準備はしていませんでした。それを受けて、僕は自分の外国人の受け入れに対する意識の低さを感じました。外国人を受け入れるということは、ブラジルの皆さんが僕たちにしてくれたようなことなのだと学びました。そして僕はその時、マリンガ市の方々が日本に来たら絶対に大歓迎しようと強く思いました。

人にしたことは自分に返ってくると言うけれど、それは国際交流にとっても当てはまると思います。友だちなどで海外に行くことが怖いという意見をよく聞きますが、それはおそらく自分がしている受け入れ方を海外の人にもされると感じるからなのかもしれないと思います。人にしたことは自分に返ってくる、というのなら、日本でできるだけ多くの外国人を理解し、受け入れてみる。できるだけ日本の国際交流活動に参加して、外国人との関わりを増やしておく。そういった行動によって、自分が外国に行った時にその国に対しての抵抗がなくなると思います。

そして今回、僕は自己研究のテーマとして文化の違いを学びたいと考えていました。ブラジルには日本と違う文化がたくさんあり、戸惑いもありました。例えば、ブラジルの方はスキンシ



Nipo Brasileiro 日本文化祭

ップが多いなど思いました。僕のホストファミリーは、どのような場面でも、とても距離が近かったです。最初は驚きましたが、だんだんと安心を感じるようになりました。その時は文化の違いというもの、最初は驚きや戸惑いを感じるけれども、僕たちの姿勢次第でだんだんと慣れていくものなのだと思います。その経験から得た自分なりの考えは、文化はどちらが良いとかそういう問題ではないということです。ブラジルの文化も、日本の文化もどちらもそれぞれ良くて、その良いところをどちらも楽しめば良いと思いました。その姿勢を持っていれば、どのような文化でも受け入れることはできると思いますし、今までにないことが経験でき、自分の視野が広がると思います。

この青年海外派遣に参加するまで、僕は自分の人生に満足していました。しかしその考えは日本に帰ってきた時、一切なくなっていました。今回ブラジルという日本か

ら遠く離れた国へ行き、国際交流の発展に尽力される方や、母国であるポルトガル語に加え、英語や日本語をひたむきに勉強するブラジルでできた友だち。そして暖かく受け入れてくれたホストファミリーと出会い、自分は何者でもないことを痛感しました。もうすぐ僕は社会人になります。社会人として働くということは、自分のためだけでなく、誰かのために行動することであり、誰かの笑顔をつくることだと僕は考えます。その向上心を常に持ち、将来多くの人を笑顔にできるような大人になるために、謙虚な姿勢をもって学び続け、様々なことに挑戦していきたいと思っています。大人になる上で大切なことを学べた青年海外派遣でした。



マリンガで知った 異国間交流の大切さ

松井 小春

ブラジル・マリンガ市での体験から、これからの国際交流において何が大事なのか。そして今後の私の人生にこの海外派遣の体験がどう活かせるのかについて考えました。

○マリンガ市

私がマリンガ市で過ごした時間は何物にも代え難いものとなりました。長いフライトの後、ようやくブラジルの朝を迎え、最初に訪れたのは、サン・フランシスコ・ザビエル学校とマリンガ市役所でした。学校訪問では、門をくぐり校舎の中庭に出るとサプライズが待っていました。全校生徒が大きな歓声とともに日本とブラジルの国旗を大きく振って出迎えてくれ本当に感動しま



功労者記念パーティー
団員・ホストファミリーと

した。日本では、人を出迎えるときは拍手だけというのが一般的ですが、ブラジルでは歓声とともに心から歓迎の気持ちを表現するという大きな違いがあり、相手に自分の気持ちを直接伝えるブラジル流のコミュニケーションを人生で初めて体験してとても驚きました。

その後、マリンガ市役所へ表敬訪問をして、マリンガ市の副市長や市議会議員、多くの関係者に会うことができました。初めて公式訪問に参加し、緊張もありましたが、加古川市とマリンガ市の交流の深さを改めてうかがい知れました。マリンガ市の代表として働く方々から直接話を聞くことができ、自分自身も加古川市の代表としてマリンガへ派遣されて、加古川市とマリンガ市を繋ぐ架け橋なのだとことを実感しました。

表敬訪問の後には、本場のシュラスコ料理を食べに行きました。その際、私はマリンガ市の副市長と翻訳機を用いて会話をすることができました。姉妹都市の副市長と実際に話すことができ、短い気持ちもありましたが、折角なら翻訳機を介さずにポルトガル語で会話をしたかったと後悔の念を抱きました。そのため、帰ってからポルトガル語の勉強により励みたい気持ちが強まりました。

○ホームステイ

私のホストファミリーは日本語がほとんど話せず、英語での会話が主でしたが、本当に温かく私を家族のように迎え入れてくれました。マリンガで有



学校訪問

名な場所に連れて行ってくれたり、地元のショッピングモールへ遊びに行ったりしました。その中でも特に印象に残っているのが、ホームステイ最終日にホストファミリーの親戚の誕生日パーティーに参加させてもらったことです。そこでは、乗馬体験をしたり、日本では見ることでできない大きな自然を見て、ブラジルならではのことを体験できました。また、日本では家族間での盛大なパーティーが珍しいので、ブラジルでは家庭内でも事あるごとにパーティーが催されていると聞いて驚いたのと同時に、人との繋がりをより強められるとても良い文化だと感じました。自分も形は違えど、日頃お世話になっている人へ感謝の気持ちを伝え、人との繋がりをより密接で良好にしたいと感じました。

○マリンガで感じたことと今後について

実際にマリンガ市を訪れて感じたことが大きく2つあります。

1つ目は、日本人よりも日本のことに對して造詣が深いことです。日本で暮らしていると、他国の文化を受け入れ、積極的に広めようとするのがあまりないように感じるので、それがどれほど難しいことが分かります。しかし、マリンガでは日本文化に関心がある人たちが多く、それを様々なイベントなどで広めようとする行動に感銘を受けました。同時に、今の日本では訪日外国人が多くいる一方で、日本文化自体が希薄

化しており関心を持っている人が減っている側面があるので、今こそ自国文化を尊重するべきなのではないかと思いました。

2つ目は、異国間のコミュニケーションにおける言語の重要性です。言葉が分からない地で、ジェスチャーなどで全身を使って伝えることはもちろん良い方法だと思いますが、自分の本当に感じていることを的確に相手に伝えるには、やはり言語はとても重要な役割を果たすということが分かりました。マリンガへ行く前は、他言語でのコミュニケーションは自分にとって不安要素でしかありませんでした。実際に現地に着いてみて、人の温かさに触れて様々なことを現地の人と話すうちに、言葉によって相手の伝えたい事が自分にとってより鮮明になっていると感じたので、他言語でのコミュニケーションは恐れるものではなく、想像以上に重要なものだと考えました。

そういった経験から、今度は自分が様々な国や言語に興味を持って勉強し、国が異なっても意思疎通が円滑にできるようサポートをしていきたいです。また、様々な国の言語を覚えると同時に日本語や日本の文化などを今以上に知り、そして発信できるようにもなりたいとこの海外派遣事業を通して感じました。



日本の反対側での生活

松尾 裕輔

ブラジルを訪れて、最初に印象に残ったことは、ブラジルの自然とその風景です。日本では、海があり山があり、多様な自然に囲まれて変化に富んでいることに比べ、ブラジルでは、トウモロコシ畑やサトウキビ畑などが、車で何時間走っても途切れることなく続き、日本では感じることも想像したこともないような限りなく広い景色でした。僕のホストファミリーは農場を経営しており、マリンガから郊外の家まで、そして家から見える景色はすべて畑でした。僕はそれを見ることで気持ちが落ち着き、いつまで見ても飽きることはない広大な自然を見ました。

次に印象に残ったことは、ホストフ



ザビエル学校で

ファミリーやマリンガで出会った人たちがフレンドリーで初めて会った人でも友だちや家族のように接してくれたことです。ホストファミリーは、僕をお客さんとしてではなく、家族の1人のように接してくれました。短い期間でしたが、とても温かく、僕の居場所がしっかりとありました。日本では初対面で相手にどう思われるのかを考えますが、ブラジルでは人と人との壁が低く、お互いのことを遠く知ることができ、人に対して恐れやためらいなどが少なく、誰にでも優しく接することができると思いました。また、ブラジルの人たちは、自分の興味のあることをとても大切にする人が多いように思いました。自分の言い事や勉強、趣味などにまっすぐだと思えます。1つのことに一生懸命になるからこそ、スポーツや勉強など、様々な分野で活躍する人がたくさんいるような気がしました。

ブラジルの人たちの考え方や人との接し方、価値観などは、日本のものとは全く違う価値観だと思えます。しかし、それが良い悪いではなく、自分もそのような考え方や人との関わり方などを知ったことで、今、勉強していることや自分のしたいことなどを考えるだけでなく、もっと大きなことを見据えたうえで、しっかり行動に移すことができるようになりました。

マリンガでは、日系人による日本文化を紹介する「日伯フェスティバル」が開催されていて、和太鼓やよきこいソ



家族で朝ごはんを食べに行く

ーランを見ました。日本から最も離れた場所でも日本の文化がマリンガの地に広がっていることに驚きました。そして、日本の音楽に合わせたマツリ(祭)ダンスや日本食を提供するお店などでは、自国の文化を混ぜながら、日本文化を独自に発展させており、日本とブラジルのお互いの文化を大切にしているように感じました。昔ブラジルに渡った日本人たちが、その場所ですべてを貢献し、街の発展に携わったのか、また、現在のマリンガの人たちが日本の文化や言葉、日本の現状などを知っていてくれていたことが大変うれしく、感慨深かったです。

1週間ほどの短い期間でしたが、マリンガで日伯フェスティバルや学校を訪れることができ、日本人が来ているということで、マリンガの人たちからたくさん興味を持って話しかけてもらい、たくさんの人と交流ができて、とてもうれしかったです。

僕はブラジルについて知らないことばかりで、文化も言葉も十分に知りませんでした。それでも、マリンガでは多くの人がサポートをしてくださり、困ることもなく過ご

すことができました。今度、僕が海外の人をサポートするときは、相手の文化や習慣について少しでも知っておくことで、日本にきたばかりであっても、安心して日本で生活を送ることができるようサポートしたいと思っています。

僕がこの派遣で学んだことは、何事でも挑戦してみることです。今回のブラジルへの青年海外派遣などの物事に挑戦することはもちろんですが、自分から気になったことを聞くことや、自分の思うことをしっかり発言することなどを学びました。今回、自分と全く違う考え方の人と生活することで、新しい価値観と考え方を学び、人生観をも変えてくれたのではないかと思います。学生の間にたくさんの人と会い、それぞれの人の文化や言語などを勉強して、今後、自分がさせてもらった経験をほかの人にも経験してもらえるように、人との関わりを大切にしたいと思っています。



優しさ溢れる国

吉元 洸人

高校に入って様々なことに挑戦したいと思っていた時に、この青年海外派遣を知り、初めての海外なので悩みましたが、そう簡単に行ける所ではないと思い応募しました。ブラジルに行くことが決まって、言葉も通じないし、初めて行く所で生活できるのかなど、不安がだんだん大きくなっていました。しかし、事前研修を受けて、色々な話を聞いていくうちに不安より頑張ろうと思えてきました。

初めての長時間フライトでやっと着いたブラジル・マリンガ。飛行機から外に出た瞬間に緊張と共に楽しみな気持ちがいっそう高まりました。ホストファミリーのジョバンニさん家族が温

かく迎えてくれて、僕は英語もポルトガル語も話せなかったけれど、ジョバンニさんが日本語を話すことができ、言葉が通じないかもしれないという不安はすぐにはなくなりました。また、ホストファミリーの両親とお兄さんはポルトガル語しか話せなかったけれど、ジェスチャーやスマホの翻訳アプリなどを使ってコミュニケーションをとり、言葉を使わなくても自分の思いが伝わった時はとても嬉しかったです。

ホームステイでは、僕が気になっていたブラジルのお菓子を朝食の時に準備をしてくれたり、朝市や日本庭園などに連れて行ってもらったりしました。行く先々でブラジルの文化を教えていただき、毎日新たな発見の連続でした。

ジョバンニさんと話をすると、日本のことをたくさん知っていてくれて嬉しい気持ちになりました。街では漢字で書いてある店や日本車が走っており、日給フェスティバルという大きなイベントでは、書道や生け花、盆栽、日本のポスターがあり、日本文化がブラジルの生活に溶け込んでいることを知りました。日本のアニメや漫画、盆踊り、音楽など様々なことをマリンガの方々は深く知っていてくれていましたが、自分がブラジルについて全然知らなかったように、日本ではあまりブラジルや他の国の事を深く知っている人は少ないのではないかと感じました。また、加古川から来たと伝えると日本に行ったことがあるよと言ってってくれて写真を



ホストファミリー

見せてくれ、日本に絶対行くと言ってくれる人もいました。ブラジルの文化について教えてもらったとき、ブラジルは様々な人種の方々がいて、多様な国の文化や食文化が混じっていることを感じる場面が多かったです。マリンガの方々は、外国人の僕たちにいろいろな質問をたくさんしてくれて、様々な人種の方がいるため外国人でもブラジル人でも関係なく関わりを大切にしているのだと感じました。日本ではブラジルのように数多くの人種の人と話す機会は少なく、外国人だと少し距離がある感じがするけれど、様々な人種の人と話す機会がもっとたくさんあれば外国人をより受け入れることができ、日本でもさらに国際化が進むと思います。

初めてのことばかりだったけれど、マリンガの方々は本当にたくさんのサポートをしてくれました。自分がブラジルでしてもらったサポートは、海外に対する不安を軽減させてくれ、日本人とはまた違った、ブ

ラジルの方々が持つ温かさや優しさを強く感じる事ができました。そして、人との関わり、繋がりをいっそう大切にしていきたいと思いました。文化、言語が違ってても伝えようとする気持ち、理解する気持ちが一番大切だと気づきました。

今後、僕はブラジルで学んだこと、見たもの、感じたこと、文化、日本との違いなどを広めるとともに、色々な国の文化を深く理解していきたいと思いました。そして、短期間だったけれど海外派遣で得たものはとても多いので、この経験を活かして自分自身もっと成長していきたいと思っています。事前に調べていても、実際に行ってみると体験しないとわからないことの方が多く、海外派遣に参加できて本当に良かったです。



学校で意気投合